オンラインセミナー「暑中・寒中における床施工」を開催

現場の実情や課題を示し議論も

日本床施工技術研究協議会

日本床施工技術研究協議会（床会／会長：東京工業大学横山裕教授）は11月29日、公開セミナー「暑中・寒中における床施工」を、オンライン形式で開催した。当日は100名を超える参加者があり、活況を呈した。

同会は、床および床施工に関する学術・技術の進歩発展をめざすとともに、社会における床施工の正しい発展に寄与することを目的に活動をしている団体。これまでに、コンクリート床表層部品質の簡易測定、評価方法の提案として「コンクリート床下地表層部の諸品質の測定方法，グレード」（床会グレード）を取り纏めているほか、2016年からは、「性能指向型」と銘打った床の施工要領書づくりに取り組んでいる。

18回目となる今回のセミナーのテーマは、「暑中・寒中の床施工」。冒頭で挨拶した横山会長は、「ここ数回のセミナーでテーマとしてきた『性能指向型施工要領書』は、このほど『パイロット版』ができ、一区切りがついた。そこで次のテーマを模索していたところ、一般的に施工要領書が基準にしているのは、春や秋の穏やかな天候だが、実際の施工は、熱い中、寒い中、風が吹く中、湿度の高い中など、過酷な環境下でも行われるという話が出た。相応の対処をして品質を確保できる場合もあるが、当然それには手間や人工がかかる。そもそも施工が不可能なこともある。しかしそうしたことは現状では工費や工期に反映されていない。一方、ゼネコン側から見れば、そこまで考慮してくれる設計、施主はなかなかいないということで、結局現場の施工者にしわ寄せがいっている状況だ。そこで今回のセミナーでは、暑中・寒中など過酷な環境下で施工が行われるとどうなるか、品質を確保するにはどれだけの手間がかかるかということを、施工の立場から設計、施主の方々に発信していきたいと考えた。最後にはパネルディスカッションも予定しており、ぜひ活発な議論が行われることを期待したい」と述べた。

▲パネルディスカッションの参加者（左から堀長生氏、亀井昭利氏、山本幸司氏、太田亮氏、山本正行氏）（円内：挨拶する横山裕会長）

続いて、床会の理事や会員による講演が行われ、まず東海大学の横井健准教授が、床会が纏めている性能指向型施工要領書の説明をした上で、今回のテーマ「暑中・寒中の床施工」の設定目的と、プログラムの概要について解説。次いで、日本大学の湯浅昇教授が、「材料の物性からみた酷暑・極寒・悪天候時の諸問題」として、低温、高温、乾燥などがコンクリートの物性に与える影響について、最新のJASS5の記述や、数多くの実験データ等に基づき詳細に解説した。

後半では、暑中・寒中など特殊環境下の床下地、張り床、塗り床施工に関し、影響や対処の実際について、床会メンバーがそれぞれ専門的立場から解説した。

「床下地コンクリート施工」についてはモノリスコーポレーション㈱・亀井昭利氏、「張り床」については日本内装仕上技能士会連合会（愛床コンサルティング）・山本幸司氏、「塗り床」については日本塗り床工業会・太田亮氏が講演を行った。それぞれ、高温、低温、高湿時などの環境要因により、材料の性状が変化し、不具合にもつながりやすいこと、悪環境下での施工は作業精度が著しく落ちることなどを実例を提示しながら説明し、またそれに伴う追加労力についても示した。

その後、亀井氏、山本幸司氏、太田氏に、日本建築仕上材工業会・SL材部会長の山本正行氏も加わり、元・㈱大林組の堀長生氏の司会でパネルディスカッションが行われた。ここでは、山本正行氏が暑中・寒中時のSL材施工について説明した後、セミナー受講者の意見も募り、聴講しているゼネコン技術者からの発言や質問もあった。

パネルディスカッション終了後は、三上貴正副会長（東京工業大学准教授）がセミナーを総括。三上氏は「厳しい環境条件下での施工について、学術的・実務的な知見が得られ、非常に有意義なセミナーだったと思う。当会としては、そうした環境下で生じる追加労力や時間などを検討し、施工要領書に反映させていくことも必要になろう。また将来的な課題として、業界全体で、環境条件に対応した柔軟で多様な受発注システムを構築していくことも求められるのではないか」と述べた。最後に、ものつくり大学・高橋宏樹教授が閉会の挨拶を行い、会は終了した。